

## < CIEC 第 61 回研究会(プレカンファレンスⅡ) 報告 >

「学び」の実践的な未来 ―子どもや若者が参加し創造する新しい文化―

日時 2006 年 6 月 11 日(日) 10:00～13:00  
会場 コープイン京都 201 会議室  
講師 目黒 実 先生  
司会 福島 健介(日野市教育委員会)  
参加 22 名

### はじめに

講師の目黒先生は、九州大学 ユーザーサイエンス機構 特任教授で、篠山チルドレンズミュージアム(兵庫県篠山市)の副館長でもいらっしゃいます。「ユーザーサイエンス」も「チルドレンズミュージアム」も、言葉はわかるのに具体的イメージに乏しく、どのようなお仕事をされておいでるか、調べました。すると、次から次へといろいろな活動が表示され、それは広く深く、簡潔にまとめきれないくらいです。

この日の目黒先生のお話もまた、先生の活動内容をベースに、実に多岐多彩にわたるトピックを、事例を交えて参加者を振り回して(失礼)下さり、息をつく暇もありませんでした。

前半は、目黒先生が「チルドレンズミュージアムと九州大学 USI 子どもプロジェクトについて」と題し講演、後半は参加者が、4～5 人のグループに分かれて、「絵本」をテーマに意見交換、そこからの話題で目黒先生がお話を加えてくださり、時間の経過を忘れる程の充実振りでした。

### 講演より

#### ■九州大学 ユーザーサイエンス機構

<http://www.usi.kyushu-u.ac.jp/about/concept.html> によりますと、「ユーザーの視点から技術と感性の融合を図り、『ユーザーサイエンス』を切り拓いていくための研究・教育拠点を確立し、実践的な研究開発システムと自立的基盤の創造を目指す。」とあります。

機構はとても大きな組織で、部門が 6 つあり、そのなかの一つであるプロジェクト部門(スタッフ約 200 名)、のなかの一つである、「子どもプロジェクト」のリーダーを、目黒氏が務められています。

#### ■子どもプロジェクト→チャイルドライフ専門職大学院

子どもたちは「究極のユーザー、真のオーディエンス」であり、この機構のプロジェクトの「技術と完成の融合した実践的な研究成果」を、子どもたちにとって「魅力的なコンテンツ・デザイン・居場所」として届けることを目的としています。つまり、子どもたちの優しい心を育てる場所は、子どもたちにとって快適な場所であり、それを研究して提供することを目的としています。現在 8 歳の子どもが 10 年経ったら大学を選ぶ年齢になるので、そのときに九州大学を選んでくれるような、そのような活動を目指し、実に多彩な活動が繰り広げられています。

たとえば 全国を巡回する"絵本カーニバル"、空間を絵本によって構成する試みは、会場が料亭だったり、また世界にたった一つしかない絵本展は、参加者が自分でストーリーを書き加えられたり、思いもつかない工夫や演出が見え隠れします。環境を考えるために、アーティストと共に研究を重ね発表の場である"ワールドプロセッサー展"を文化・科学施設へ無料貸し出し、山村・離島・病院の子どもたちへと出前授業のプロデュースも。"子ども病院支援活動"は九州大学医学部の小児病棟の新設時に空間のデザインや運営に関する協議に参加し、議論が繰り広げられました。このように、上げればきりががないほどの幅広い活動で、しかも一つ一つが独創的なアイデアであふれ、どれもこれも、一言では語れない内容なのです。

そして、設立に向けて活動されている「チャイルドライフ専門職大学院」とは、子どもに関するいろいろな分野のプロフェッショナル養成の場です。仮に、子どもが手術することになった時に、不安感を与えずに病状や手術の説明をして回復に向けて前向きに納得させる人、加害者となった時の子ども専門の弁護士、親を亡くした時や被害者となった子どものケアをする人、教育・福祉機関はもとより、医療・情報・科学・娯楽・出版・文具製造・デザイン・マーケティングなど、あらゆる現場で子どものプロとして活躍する人を育成しようとするものです。また、それは、ボランティアではなく、ビジネスとして成立していなければならない、ビジネスとして成立すれば地域ともつながる、それがチルドレンズインダストリーなのです。近年、日本でも、医療保育士の制度が作られようとしています。

[http://www.usi.kyushu-u.ac.jp/about/section02\\_2.html](http://www.usi.kyushu-u.ac.jp/about/section02_2.html)

#### ■チルドレンズミュージアム

これまでに目黒先生が手がけられたチルドレンズミュージアムは、福島県霊山町、兵庫県篠山市、沖縄県沖縄市の 3 つです。本来アメリカで生まれたチルドレンズミュージアムを、日本に合う形で、立ち上げられました。「子どもたちのために」を合言葉に、リーダーの下に若いアーティストやサイエンティスト、教育学者やファシリテータ(伴走者)が集い、「遊び」と「学び」を往復運動するような構成の展示やワークショップを展開する子どもたちの居場所がチルドレンズミュージアムです。ここには、休日に家族で訪れる子どももいれば、1年の300日くらい通う子どももいます。スタッフは教育しようというのではなく、「もう1週間がんばろう!」と思ってくれればそれでいい、というくらい、ゆっくりと子どもを見ています。先生が副館長を勤められる、篠山チルドレンズミュージアムは、廃校となる中学校の校舎を再生した施設です。古いものを残しつつデザインしなおす、技術と感性で埋め込んで再生することは、現在の日本に大切なことの一つとして、過去をつぶさずその上に構築してゆくことだとおっしゃっていました。篠山チルドレンズミュージアムでは、このために養成されたプロのファシリテータが活躍しています。ファシリテータという存在もまた、教育の現場にいるものとして参考にすべき存在です。にぜひサイトをご覧ください。

<http://city.sasayama.hyogo.jp/>

#### 意見交換

4~5人のグループに別れ、それぞれのテーブルに1冊ずつ絵本が用意され、自分たちの子

もの時代はどんな遊びをしていたか、絵本にまつわる思い出はあるか、などを世代の背景とともに語り合われました。その後、グループでの話題を代表者が発表する形で、参加者にシェアされ、昔と今の違い、地域社会の長所短所、子どもと自然とのかかわり、玩具や遊び場所の移り変わり、男の子の遊びと女の子の遊び、都会の子どもと田舎の子どもなど、回顧状態の意見が多く出ました。意見交換の中では、参加者は、教師や親の立場ではなく、子どもの立場で話していました。

子どもは地域によって育てられるということと、ファンタジーの世界はあの世とこの世を行き来することであり、絵本がそれを可能にさせる一つのツールであること、そして大人になっても少年のような心が必要なのではないかと、目黒先生は話されました。

## 質問

・学校が荒れている状態を、どのように解決すべきか？

回答：教育の社会システムが悪いとしか言いようがない。そういつてしまえばおしまいのようなのだが、しかし、現在のシステムのしわ寄せが子どもにきている以上、そこを変えるしか方法はないと思う。中学生が小学生を、高校生が中学生を、大学生が高校生をケアするようなシステムを作り、人の役に立っていることを自覚し喜び、そして、自分の長所や才能に気づかせてあげることが大切である。システムでいえば、仕事に従事する期間が短すぎるので、本腰で取り組みきれていない。大きな仕事、システムや仕組みを創造したり、変えていくことは時間が掛かるものであるが、行政では、短い期間で転勤があり、いい仕事、いいシステム作りができないままなのではないだろうか？

・CEIC への要望は？

回答：ぜひ、子どもプロジェクトを作って欲しい。その中で ICT の活用で子どもの防災・防犯のシステムを構築してはどうだろうか？また、ICT を絵本のように使いこなせているだろうか？ICT が想像力をわき出させるようなツールとして使えているだろうか？そのようなプロジェクトに取り組んでみては？

生協をうまく利用するというか、生協の働きで、もっといろいろなことがうまくいく。もっと、生協が参加・従事したら成功することがたくさんあるはず。

## 最後に

目黒先生は、非常に〇〇な方です。この、〇〇にはたくさんの言葉が入ります。例えば、「眼差しが魅惑的」など。着眼点が一般的ではなく発想が豊かで、それぞれが意外にもつなげられ、独自の創意工夫でコーディネートされます。カテゴライズできない多くの経験から、瞬間の感動を信じ、出会いを大切に、そして何より、他に喜ばれることを自分の喜びとされていらっしゃるような、なんとも不思議な視線を放つ深遠な目黒先生の、素敵な著書をご紹介します。ご一読いただければ、より、理解が深まると思われます。

「学校がチルドレンズ・ミュージアムに生まれ変わる・地域と教育の再生の物語」

発行：(株)ブロンズ新社 ISBN4-89309-2319-1

(文責 辰島 裕美)